備陽史探訪の会　バス例会

美作の王墓とホルモンうどんの旅

美和山１号墳（津山市）

備陽史探訪の会　古墳部会

○ 行程（天候・交通事情などによって変わることがあります）

８：００　福山駅集合

↓

・三成古墳（津山市久米）：全長３５ｍの前方後方墳（国指定）

↓

・美和山古墳群（津山市二宮）

：全長８０ｍの前方後円墳が盟主の古墳群（国指定）

↓

１２：３０　昼食　ホルモンうどん

↓

・津山洋学資料館（津山市西新町）：「洋学」に関する博物館

そのほか、旧「出雲街道」の町家が残る

↓

・植月寺山古墳（勝央町植月）：全長９１ｍの前方後方墳

↓

１８：００　福山駅着

●美作国とは・・・

美作国（みまさかのくに）は、山陽道に位置し、現在の岡山県の東北部にあたります。

国全体が海に面しない内陸の山間地であり、平地は山々の合間に盆地が点在するだけです。

主要な盆地は三つあり、西部の真庭市を流れる旭川周囲の盆地、吉井川の流れる津山盆地を中心とする中央部、梶並川・滝川が吉野川に合流する東部の美作市の盆地で、美作はその三盆地を核におよそ西部（真嶋郡、大庭郡）・中央部（苫田郡、久米郡）・東部（英多郡、勝田郡）の三つに別れます。

岡山三大河川のうち、旭川と吉井川の上流域に位置し、近代化が進むまでは高瀬舟が流通の役目を担いました。

旧石器時代から人々が住み始め、丘陵の縁辺部などには弥生時代の集落が営まれています。古墳時代になると、河川ごとに首長墓の築造が認められます。

和銅６年（713年）に、備前国から英田郡（あいだぐん）、勝田郡（かつたぐん）、苫田郡（とまたぐん）、久米郡（くめぐん）、真嶋郡（ましまぐん）、大庭郡（おおばぐん）の６郡を分けて設けられました。

鎌倉時代は、源氏による平氏征討時から幕府の有力者である梶原景時、和田義盛が守護となりましたが、両者とも政権内部の抗争に破れ、北条氏の領国となりました。

美作国は、古代から歴史上一貫して美作を基盤とする安定勢力が出現せず、南北朝の動乱から戦国時代の終焉まで、山名氏、赤松氏、尼子氏、浦上氏、毛利氏、宇喜多氏など周辺の大勢力の草刈り場となり、最終的に小早川秀秋が備前・美作両国を領するも、わずか２年で改易されました。

小早川家断絶後は森氏が津山に築城して入封して津山藩が成立しましたが、５代94年の支配で改易。その後、山陽道に睨みをきかす意味で津山に徳川政権直轄の代官所が置かれ、美作国内は小藩に分割されました。

●久米三成４号墳（津山市久米町中北下）

久米三成古墳は、吉井川の支流である久米川の中流域に所在します。この場所は、東方に流れる久米川に、西北部から宮部川が合流して本流域最大の沖積平野を形成しています。

この古墳は、昭和52年に墓地の造成中に発見されたもので、墳長35m、後方部一辺20mほど、前方部長15mの前方後方墳といわれています。けれども、葺き石が後方部頂にしかないこと、前方部と後方部の境のくびれ部が非常に低いことなどから、方墳が二つ隣接しているのではないか、という説もあります。

埋葬主体は、後方部頂に１基、前方部頂に１基、後方部墳丘に３基の計５基の組み合わせ式石棺が確認されています。両墳長部の石棺はともに主軸に並行しています。規模は、内側で長さ２m、幅45㎝程度とほぼ同規模であるばかりでなく、内部に２体の人骨がおさめられていたこと、掘り方が二段になること、石棺周辺に板石を配すること、内部に赤い顔料が塗布されていることなど非常に似通った特徴を持っています。墳丘の石棺は、長さ１m以下の小形のものであり、古墳築造後に営まれたようです。

後方部の石棺の人骨は、壮年～熟年の男性と壮年の女性。前方部の石棺は、熟年の女性と小児でした。墳丘の３基の石棺からは人骨は出土していませんが、その大きさから小児のものと考えられています。

副葬品は、後方部の石棺から変形四獣鏡、鉄剣、鉄斧、勾玉が出土しました。前方部石棺、墳丘石棺からは皆無でした。他にくびれ部から手鎌、壷形土器が出土しています。

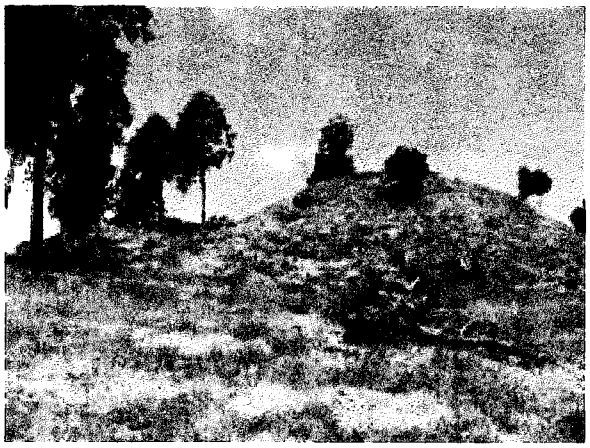
この久米三成４号墳の被葬者は、久米川流域の平野を生産拠点としていた集団の首長と考えられます。築造年代は、鏡と壷形土器の特徴から、古墳時代前期でも新しい時期に位置づけられるようです。

●美和山古墳群（津山市二宮）

津山市立向陽小学校の正門の北東のこんもりした森の中に残るのが、美和山古墳群です。

ここには、前方後円墳１基と、円墳３基の計４基の古墳群があります。これらの古墳は、美作地方では最大級のものです。

もっとも北に位置する１号墳は、墳長 80m、後円部径 48mで美作地方最大の前方後円墳です。前方部は西方向に向けられています。前方部頂より後円部頂の方が高く、その差は４ｍです。発掘調査の結果、埴輪および葺き石の存在が確認されています。中世にはこの古墳を土塁に見立てて、北側くびれ部に隣接して美和山城が築かれています。この時、後円部の東側と前方部北西側に土塁が継ぎ足され、さらに墳長南端にも土塁が及んでいます。このため、いびつな前方後円形となっており、別名「蛇塚」とも呼ばれています。



２号墳は、１号墳と３号墳の間に位置する径 34m、高さ 6.5mの円墳です。調査の結果、埴輪と葺き石を持つことが判明しています。別名“蛇塚”とも呼ばれており、墳頂に「蛇塚」碑が建てられています。

３号墳は、最も南に位置する径 36m、高さ 6.5mの円墳です。１号墳・２号墳同様埴輪と葺き石を持ちます。別名“耳塚”とも呼ばれています。

６号墳は、調査で新たに確認されたもので、２号墳の北東部に隣接する径 17m、高さ２ｍの円墳です。葺き石を持ちますが、出土遺物は確認されていません。

いずれの古墳も、出土した埴輪から前期の築造と考えられています。

●津山洋学資料館（津山市西新町）

津山市を中心とした美作地域は、江戸時代後期から明治期にかけて、宇田川・箕作両家をはじめ優れた洋学者を輩出したことで知られています。

オランダから長崎・出島に渡来する文物を通じて、世界を知るためにオランダ語を学ぶ「蘭学」が生まれます。蘭学者たちは弾圧や迫害など多くの困難の中で、研究を進めてきました。

やがて欧米各国の制度や文物を取り入れる動きが高まると、「蘭学」は「洋学」へと変わっていきます。そして、津山からは多くの逸材が世に出て行きました。

●箕作阮甫（みづくりげんぽ）旧宅

箕作阮甫（1799～1863）は、津山藩医の家に生まれ、宇田川玄真に洋学を学びました。41歳で幕府の「蕃書和解御用」（外国文書翻訳の仕事）に任ぜられ、ペリーが持参した米大統領親書（国書）を翻訳し、ロシア使節プチャーチンの来航時にも外交文書の翻訳や交渉に参加しました。「蕃書調所」（洋学の研究・教育機関）が設けられると、58歳で日本最初の「教授」に任ぜられています。西洋文化の導入に貢献した訳述書は、医学・語学・西洋史・兵学・地理学など広範囲にわたります。

洋学資料館に隣接する「箕作阮甫旧宅」は、彼の生まれた家で、その当時の町家の様子や暮らしのスタイルがうかがえるように、復元してあります。

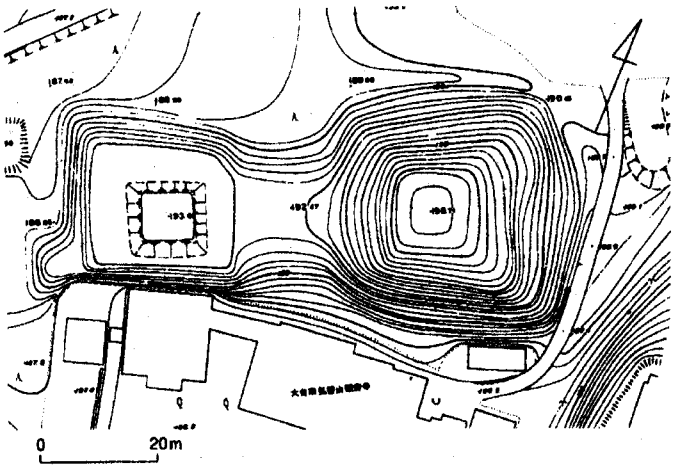
●植月寺山古墳（勝央町植月）

植月寺山古墳は、勝央町植月の天台宗観音寺の裏山にあります。

この古墳は美作地方で最大の古墳で、前方後方形です。墳長は約91mで、後方部の一辺約40m、高さ約９mです。前方部は、南側が観音寺の境内地の造成によって変形しているものの、先に向かってやや開き、前端の幅は約36mです。

後方部北東側の浅い掘りこみや前方部周辺の平坦部など、この古墳の築造に当たり、墳丘周辺の自然地形を大きく改変していることがわかります。

また、後方部は前方部にくらべて、約４mも高いことが注目されます。墳丘には人頭大の石が散乱しており、葺き石のあったことは認められますが、埴輪は知られていない。またそのほかの遺物も発見されていない。



これらの特徴のうち、前方部と後方部の高さの差が大きいことは古式の前方後円(方)墳の特徴を示しており、この古墳は前期の中でも早い時期のものであろうと考えられています。

さらに、この古墳の築かれた盆地の南側の丘陵には、４基の前方後方墳が確認されており、累代の首長度として津山盆地の中でも前方後方墳の集中する地域として、注目されています。

●観音寺

本尊　聖観世音菩薩

縁起　平安時代の天安年間（857～859)、比叡山第３祖慈覚大師によって創建されました。

現在の地には、慶長５年（1600)、移転築造。

また、本寺で植月小学校が明治８年に開校。同14年まで仮校舎になっていました。その頃、片山潜も教鞭をとっていました。

備陽史探訪の会